

關西大学東西学術研究所資料集刊 17

關西大学出版部

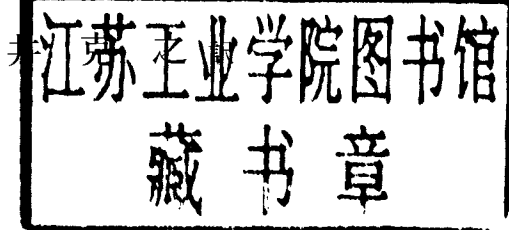
中国語文法学史稿

關西大学出版部

中国語文法学史稿

龔 千 炎 著

龔
鳥



関西大学東西学術研究所資料集刊 17

中国語文法学史稿 定価 5,000円 (本体 4,855円)

平成 4 年 3 月 31 日 発行

著 者 龔 千 炎

前関西大学東西学術研究所研究員
文学部教授

訳 者 鳥 井 克 之

発 行 者 関西大学東西学術研究所

〒564 吹田市山手町 3 丁目 3 番35号

発 行 所 関 西 大 学 出 版 部

〒564 吹田市山手町 3 丁目 3 番35号

印 刷 所 株式会社 木 原 印 刷

〒532 大阪市淀川区木川東 4 丁目17番31号

ISBN 4-87354-144-1 C3087

落丁・乱丁はお取り替えます。

序

このたび本研究所資料集刊第17として『中国語文法学史稿』を刊行することになった。

本書は中国語言応用研究室主任研究員の龔千炎氏が同研究所の研究生のための講義ノートを基礎として執筆したもので、文字通り中国文法学の歴史を鳥瞰した労作である。

本資料集刊としては前回刊行の『現代中国語における外来語研究』に続く中国語学関係の翻訳となる。

訳出者 鳥井克之氏は本研究所の前研究員で本学文学部教授であり、長年“日本語彙交流の史的研究”を研究テーマとして多大な業績をあげられているのは周知のとおりである。

本書は昨年度までの研究成果をまとめられたものである。

同研究員の労を多とするとともに、本書が学界をはじめ広く活用されることを切に期待してやまない。

平成3年2月

関西大学東西学術研究所

所 長 大 庭 脩

《中国语法学史稿》日译本序

蔡千炎

有人说中国语法学是一门年青的科学，这话又对又不对。如果只从1898年马建忠《马氏文通》算起，那当然是够年青的；但是中国语法学源远流长，早在春秋战国时期的《春秋》注释中就有类似语法的分析，它经过长期的孕育酝酿，有自身的传统。所以换一个角度看，中国语法学又是一门不年青的科学了。

又有人说中国语法学来自西方，这话也是又对又不对。就拿《马氏文通》来说吧，它固然模仿拉丁语法，用西方的语法框架来套汉语的材料；但是它也大量继承了我国传统的语法研究成果，例如关于句、读、顿的理论，关于虚词尤其是助字的理论，关于句式、语序、省略、倒装的说法，等等。所以从某种意义上说，《马氏文通》应该看作是中国语法研究与西方语法学的交汇和融合。人类文明进化史表明，

学科创建之初有时模仿也许是不可避免的，也许可以不叫作模仿而叫作引进或创造。本国没有的东西，也可以在國內创造，也可以从国外引进，在这个意义上，引进是否也是一种创造？！

不过，也无庸讳言，《马氏文通》以后的40年间，尽管诞生了《新著国语文法》这部反映白语文规律的大著作，但是中国语法学界确实一直存在模仿西洋语法、忽视汉语特点的倾向。三十年代、四十年代，正由此而引发了中国文法的革新运动，主要代表人物是王力、吕叔湘、高名凯以及陈望道、方光蕙。王、吕、高的巨著《中国现代语法》、《中国文法要略》、《汉语语法论》可以认为代表了整整一个时代——文法革新时代。这些著作借鉴索绪尔、叶斯柏森、房德里耶斯等人的语言学理论，在进行了中西古今对比之后，充分揭示了汉语语法特点，并归纳整理出了现代汉语语法的新的科学系统。陈、方二人则正确指出：中国单语（词）本身既然缺少形态，那么语法研究的重点就应该是词语之间的语法关系。

1949年新中国成立以后，由于中国学者注意“化西为中”，借鉴吸收西方新的语言学理论和方法——结构主义、转换生成语法、格语法等，从汉语事实出发独立地进行汉语语法研究，一方面注意深入分析语法现象和充分揭示结构规律，另一方面积极探索汉语语法理论和研究方法，因而中国语法学获得了大繁荣和大发展。科学语法方面，出版了《现代汉语语法讲话》（丁声树等）、《汉语语法分析问题》（吕叔湘）、《现代汉语语法研究》（朱德熙）这样高水平的著作；教学语法方面，五十年代制订了统一的“暂拟汉语教学语法系统”，八十年代对它加以修订又颁布了统一的《中学教学语法系统提要》，还出版了北京大学（朱德熙）和复旦大学（胡裕树）所主编的《现代汉语》教材；通俗语法方面，出现了拥有广大读者的《语法修辞讲话》（吕叔湘、朱德熙）、《汉语语法常识》（张志公）等。此外，历史语法、理论语法、口语语法、方言语法、对外教学语法等方面，也都获得了一定的发展。

我们看到，一部中国语法学史，就是结合汉语事实，不断引进、消化、完善新理论和新方法的历史。如果从《马氏文通》算起，那么，也可以说“一部中国语法学史，就是不断向汉语特点回归的历史”。（《史稿·结束语》）

中国过去缺乏研究汉语语法学史的传统，一直到本世纪三十年代末，才有陈望道在其论文中对此加以讨论。以后虽然时有汉语语法学史的散篇论文发表，但作为一门新兴学科受到关注并得到发展，却还是最近几年的事情。《史稿》之前，有林玉山《汉语语法学史》（1983）、吕必松《现代汉语语法学史论》（1980，1981）等专著问世。不过，我们愿意指出，《史稿》的讲汉语语法学史，特别注意“历史地、动态地、系统地研究”（绪论），也就是着重研究历史上每一位语法学家、每一部语法著作的横向纵向联系，进行横向、纵向、中西的比较，探索它们的前因后果关系，从纵横交错的语法学发展网络中把握个体。《史稿》也特别注意“史”和“论”的有机结合，依史立论，由论

观史，加强对人物、事件、著作的理论评说，所以从某种意义上说，《史稿》也可以认为是一部中国语法学批评史。

以上说明我们写作《中国语法学史稿》的考虑和宗旨。至于多大程度上实现了我们的企图，尚有待于读者的判断。《史稿》日文译本的出版，正好提供了一个机会，让我们听取友好邻邦日本的教师们和学生们的意见，以便能够改正本书的错误和其他不足之处。《史稿》承日本关西大学鸟井克之教授翻译并交付出版。鸟井克之教授是日本的社会活动家、中国语文学专家，长期从事中日友好工作，历任奈良县日本中国友好协会理事长、会长，关西大学国际交流委员会副委员长；他为中日文化交流作了不懈的努力，先后翻译出版了《现代汉语外来词研究》（高名凯、刘正琰）、《现代中国史》等，编著了《中国语语法入门》、《中国语教科书》、《中文基础讲座》、《中国的图书馆》等。但愿《史稿》在日本的出版，能为中日文化交流的友好事业作出一份应有的贡献。

献！

1990年11月15日

中国·北京

『中國語法學史稿』 日訳本序

龔 千 炎

ある人は中国の文法学は新しい学問であると言うが、この言葉は正しいものであり、また正しくないものでもある。もしただ1898年に馬建忠が『馬氏文通』を著した時から数えるならば、それは当然かなり新しいものである。しかし中国の文法学の源流ははるか昔に遡る事が出来、早くも春秋戦国時代の『春秋』の注釈の中に文法的分析に類似したものが見られるので、それは長期にわたる蓄積と熟成を経て、それ自身の伝統を具えているものである。それ故に角度を変えて見れば、中国の文法学もまた年を経た伝統のある古い学問になっているのである。

またある人は中国の文法学は西洋から来たものであると言うが、この言葉もまた正しいものであり、また正しくないものでもある。『馬氏文通』について言えば、それはもとよりラテン語文法を模倣し、西洋の文法の枠組みを中国語の資料に当てはめたものである。しかしそれはまた「句（文）」「讀（節）」「頓（句）」に関する理論、虚詞、特に助字に関する理論、文型、語序、省略、倒置に関する見解など、中国の伝統的な文法研究の成果を大量に継承しているのである。それ故にある意味合いから言えば、『馬氏文通』は中国語文法研究と西洋の文法学との集積と融合であると見なすべきである。人類文明の進化の歴史は次のようなことを明らかにしている。即ちある学問が形成される初期の頃においては、時には模倣も避けることの出来ないものであるかも知れず、またそれを模倣と呼ばずに導入あるいは創造と呼ぶことも許されるかも知れない。自国に無いものは、国内において創造しても差しつかえないし、また外国から導入しても差しつかえないのである。この様な意味合いから言えば、導入もま

たある種の創造であるのかも知れないのである?!

しかしまた、率直にはばかりことなく言えば、『馬氏文通』以後の40年間には、『新著國語文法』という白話文の法則を反映した大著が誕生したけれども、中国語文法学界には確かに西洋文法を模倣して、中国語の特徴を軽視する傾向が引き続いて存在していた。1930年代から同40年代にかけて、正にこの傾向の存在により、中国語文法の革新運動が引き起こされた。その代表的人物は王力、呂叔湘、高名凱および陳望道、方光燾である。王力、呂叔湘、高名凱等の巨著『中國現代語法』、『中國文法要略』、『漢語語法論』はある一つの時代、即ち文法革新の時代全体を代表するものと見なしうるのである。これらの著作はソシュール、イエスペルセン、ヴァンドリエス等の一般言語学の理論を参考にして、古今中外の比較対照を行った後に、中国語の特徴を十分に明らかにし、それらを帰納して整理し、かつ現代中国語文法の新しい科学的体系を打ち建てたのである。陳望道、方光燾の二人は、中国語の単語それ自体には形態が欠けているので、文法研究の重点は語句の間の文法関係に置かなければならないと言う正しい指摘を行ったのである。

1949年に新中国が成立した後、中国の学者は「西洋を中国のために役立てる」ことに気を配り、西側の新しい言語理論と方法、即ち構造主義、変換生成文法、格文法等を参照して吸収し、中国語の事実から出発して中国語文法研究を自立的に行い、一方では文法現象の分析の深化と構造法則の十分な解明に注意し、他方では積極的に中国語文法理論と研究方法の探求を行ったことにより、中国語文法学は大いなる繁栄と高度の発展を勝ち取ったのである。科学文法（記述文法）の方面においては、『現代漢語語法講話』（丁聲樹等）、『漢語語法分析問題』（呂叔湘）、『現代漢語語法研究』（朱德熙）というような高い水準の著作が出版された。学校文法（規範文法）の方面においては、1950年代には統一された「暫擬漢語教學語法系統」が制定され、1980年代には「暫擬系統」に対して修訂を行い、統一された「中學教學語法系統提要」が公布され、更に北京大学（朱德熙）と復旦大学（胡裕樹）がそれぞれ主編した大学教材『現代漢

語』が出版された。社会人向け文法の方面では広範囲にわたる読者を獲得した『語法修辭講話』（呂叔湘、朱德熙）、『漢語語法常識』（張志公）等が出現した。このほかに、歴史文法、理論文法、口語文法、方言文法、外国人向け学校文法等の方面においてもまた何れもかなりの発展を遂げたのである。

中国語文法学史こそ中国語の事実に結び付けて、新しい理論と新しい方法を絶えず導入、消化して、完璧なものにする歴史にほかならないものであることを、我われは確認したのである。もし『馬氏文通』より見始めるならば、「中国語文法学の歴史は中国語の特徴に向かって絶えず回帰する歴史である」（『中國語法學史稿』に対する結びの言葉、本書429頁）とすることが出来るのである。

中国では昔から中国語文法学史を研究する伝統に欠けていたが、今世紀の30年代末になって、ようやく陳望道が彼の論文においてこの事に対して討議したのである。それ以後は時折、中国語文法学史に関する論文が散発的に発表されたが、一つの新興の学問として注目を浴び、かつ発展を遂げたのは、やはり最近の数年来の事である。拙著『中國語法學史稿』が出版される前には、林玉山『漢語語法學史』（1983年）、呂必松「現代漢語語法學史話」（1980—81年）等の専門的著書が世に問われた。ところで、私は以下の事を指摘しておきたい。即ち、拙著で中国語文法学史を論じるに当たって、特に「歴史的に、動態的に、系統的に研究する」（本書「緒論」）ように注意した。つまり歴史上におけるそれぞれの文法学者とそれぞれの文法著作の横と縦との連携を研究し、共時的、通時的及び中国と西洋との比較を行い、それらの間の前後関係と因果関係を探求し、縦横に交差する文法学発展のネット・ワークの中から、各文法学者と各文法著作の個体を把握することに力を注いだのである。拙著はまた特に「歴史」と「理論」の有機的結合に注意して、史実によって立論し、理論によって歴史を考察し、人物、事柄、著作の理論に対する評論を強化したことにより、ある意味から言えば、拙著はまた中国語文法学評論史であると見なすことも出来るのである。

上述において、我われが『中國語法學史稿』を執筆する際の考慮と主要な理

念を説明した。かなりの程度まで我われの意図が実現されたが、なお読者の判断を待つものである。拙著の日本語訳本の出版は、本書の誤謬と足らざる所を改訂できるようにするために、友好的な隣邦である日本の教員、学生達の意見を我われに聴取させる、正にまたとない機会を提供してくれたのである。(中略) ただ『中國語法學史稿』の日本における出版が、中日文化交流という友好事業のために応分の貢献を為しうることを願うものである。

1990年11月15日

中国・北京に於いて

序

龔千炎氏が中国語文法学史を書き上げたので、私に本書の冒頭に数言書いていただきたいと申された。そこで私はこの機会を借りて、私の中国語文法研究で遭遇した問題に対する感想を少し述べることにしたい。初めて正式に中国語文法について論じた書物は『馬氏文通』であり、まもなく出版百周年を迎えようとしている。この百年間に多くの専門的著書と論文が出版され、中国語文法研究が直面した原則に関わる問題も次第に人びとによって明確にされてきた。それではどのような問題が存在しているのだろうか。私は三つの側面の問題があると考えている。

第一の問題は一般的な文法理論と中国語の実態との問題である。昔は中国には系統的な文法の著作はなく、また系統的な文法理論も存在せず、あらゆる理論はすべて外国から来たものであった。外国の理論はそこで焼き直され、我われもまたそれについて変化していった。これは悪い事ではない。問題はいかなる理論もすべて中国語の実態と結合しなければならないと言う事である。しかし「結合」という言葉は語ることはとても容易いが、その実行は極めて困難であり、機械的に導入したり、強引に適用したりした事がなかったと言い切れないのである。

第二の問題は現代中国語文法と古代中国語文法との関係の問題である。本来ならば、それぞれの言語は時間に連れて変化しているものであり、この変化は漸進的なものであり、音韻も語彙もまたそのようなものであり、文法もまたそのようであるべきである。ところが中国語の歴史にはその特殊な一面、即ち極めて長い段落の時間が存続している。少なく見積っても一千数百年もあり、書面語つまり文言は口語つまり方言から離脱してその場に踏み留まっている。この様に現代中国語文法の様相は古代中国語文法のそれとは相当に大きな隔たり

があり、現代中国語文法の枠組みを出来るだけ役立たせて、古代中国語文法に適用させようとして、何れの学説を適用してもすべてどうもぴったりと適合しないものである。また古代中国語文法の内部においても、時代の差異に対するそれ相応の注意も払われていないのである。

第三の問題は現代中国語の口語と書面語との異同の問題である。書面語は最も厳粛なものから最も活発なものまでの連続体である。同様に、口語にもまた莊重なものと気軽なものとの差異があり、これまた一つの連続したものである。両者には重合した部分もあれば、また各自の独特な部分もある。現代中国語文法を論じるには何を論述の対象にすべきなのか。ただ重合した部分だけを述べて、独特な部分を述べないのか。あるいはそれらを区別せずに一括して論じるのであろうか。

これらの問題はこれまでに提起した人がいなかったわけではないが、その後、現在に至るもなお真剣に取り組まれたことがなかったのである。もし文法学史の著者がこの角度からこの数十年間に発表された著作をこまやかに念入りに調べる事が出来れば、それこそ過去の成果をより素晴らしく総括できるばかりでなく、ある程度まで未来の努力すべき方向を指し示すことができるであろう。私はこの様な考えを本書の著者と読者に捧げるものである。

1986年8月20日

呂 叔 湘

目 次

序 大庭 脩

『中國語法學史稿』日訳本序 龔 千 炎

序 呂 叔 湘

緒 論 1

1 中国語文法学史の対象と任務 1

2 中国語文法学史の時代区分 2

(1) 生成・萌芽期 (2) 草創・模倣期 (3) 模索・革新期

(4) 発展・繁栄期

第1章 文法研究の萌芽（A D475年 — 1897年） 4

第1節 文法意識の萌芽 5

第2節 虚詞の研究 8

(1) 漢・魏・晋朝の虚詞に対する個別的解釈

(2) 南北朝以後の虚詞に対する分類の説明

(3) 宋朝の「實字」「虚字」という明確な術語の提起

(4) 明清兩朝の虚詞研究著書の公刊

第3節 句讀の学問 16

第4節 文法、統辞論 19

(1) 唐宋以後に出現した「文法」「統辞論」の考え方